

道元における思想展開の一考察

——北越入山を契機として——

近 藤 良 一

道元の宗教の性格を決定する重要な問題点の一つに、寛元元年の北越入山とそれに伴う思想の展開がある。入越の真相については早くから種々の論議がなされ、未だに結論が下されない状態であるが、本論ではこの事にはふれずに、入越を契機とする思想の展開を、清規を中心に考察したいと思う。

それは、清規は會下の僧團のみを対象として説かれたものであり、そこには在俗の信徒が介在していないので、對機的な示衆のパーセンテージが低いと考えられるからである。

道元には清規に関する撰述は多数あるが、典座教訓・辯道法・赴粥飯法・衆寮箴規・對大己五夏關梨法・知事清規の六編は後世『道元禪師清規』として編集され、道元の清規の綱格をなし、この他『正法眼藏』中に、重雲堂式・洗淨・洗面・看經・安居・示庫院文等があるが、ここではこれ等すべてを同一線上に並べて取扱ひ、以下の考察を進めることにしたい。

これ等を通じて云える事は、その中に示されている行持に

原理を與え、言わば道元の意義付けとも云える事に筆をさしていることであり、この事は道元が『道元禪師清規』に含まれている各篇を撰述したのと同じ意圖をもつて『正法眼藏』中の清規類をも示した事で窺われる。これがすべてを一括して扱う理由の一つになるのであるが、然し詳細に検討すると、同じ意義付けにしても、或は内容から見ても、入越を境に看過する事の出来ない思想の展開が見られる。そしてこの事が道元の宗教をして出家的或は反世間的と呼ばしめる一つの理由となつたと考えられる。

先に擧げた各篇のうち入越以前に撰述又は示衆されたものは、典座教訓・重雲堂式・洗淨・洗面・看經である。これ等を一瞥してまず氣が付く事は、作法規矩を述べる事よりも、それ等の行動形式を實現する事に如何なる意義があるかの考察に努力をしている點であり、しかもそれが極めて日常性・現實性に富んでいる事である。例えば「洗淨」に於て「水をも

て身をきよむるにあらず、佛法によりて佛法を保任するにこの儀あり、これを洗淨と稱す」「佛剃屋裏の威儀は洗淨なり」と洗淨の時はこれ以外に佛道修行はなく、洗淨の作法が現成する所に佛國土が現成すると、洗淨と云う日常卑近な事柄に深い精神的意義を與え、典座教訓では同様に日常性の重視を、調理をする場合に誠意をこめてなす所に見出し「不_レ可_三一念疎怠緩慢、一事管見、一事不_三管見。功德海中、一滴也莫_レ讓、善根山上、一塵亦可_レ積歎」と我々の人格の上に功德を積み善根を植えつづけるのも、日々の行持に専念する所に具現せられる事を教え、又「先看_レ米便看_レ砂、先看_レ砂便看_レ米、審細看來看去、不_レ可_三放心。自然三德圓滿、六味俱備。」と自己の最上を盡す所に佛道が現成する事を強調している。これと同様の考えは天童山掛塔中の體驗を通じて、日常性に即した修行の重要さと、自らの仕事を自らで果たす尊嚴性についての訓話によつても示されており、典座教訓は道元の著作の中でも最も日常性と庶民性を持つものと云える。

入越以前の諸篇のうち、重雲堂式は最も反世間的性格の窺われるものであるが、然しこれと姉妹篇をなす後年の辯道法・衆寮箴規に比べる時、それが單に理想に終わつている事に注目したい。即ち第一條で名利を排斥し、第三條に於て「むかしのひと、とほき山にすみ、はるかなるはやしに、おこなふし。人事まれなるのみにあらず、萬縁ともにすつ。韜光晦跡せし

こころをならふべし。……いたづらに世縁にめぐらさむ、なげからざらめや」と述べている。これを衆寮箴規等で名利・世俗との絶縁を要求し、山居の絶對的必要性を説いているのに比べる時、ここでは單に深山で專一に辯道した祖師達への憧憬と、弟子が俗事に煩わされる事への嘆嗟に終わつている事に注意すべきである。辯道法に於て「佛佛祖祖、在_レ道而辯、非_レ道而不_レ辯」と述べているこの「道」が出家在家を問わない、各自の持場で最善を盡す意味での道ではなく、「死生不_レ離_レ叢林、拔_レ群無_レ益」と續けて示している如く、叢林の内₍₃₎に於てのみ可能な、出家道の辯道を意味しているのであるが、この事は辯道法が撰述されたと推定される寛元三年の冬の上堂で「汝等雲水、寄_三身心於山野、安_三身心於佛道、不_レ可_レ劣_三於俗人、不_レ可_レ劣_三於朝臣」(『永平廣錄』卷二)と出家主義を明らかにしている所からも證され、當時の道元が反世間的色彩によつて濃厚に彩られつつあつた事が知られる。これが更に建長元年に撰述された衆寮箴規になると「寮中不_レ可_レ談_三話世間事、名利事、國土之治亂、供衆之麁細。是名_三無義語、無益語、雜穢語、無慚愧語、固制_三止之」₍₄₎と修行僧に一切の世俗的問題や政治との絶縁を要求するに至るのである。尙この建長元年正月の上堂で「當山兄弟、須_レ惜_三光陰、而坐禪辯道_上者也。莫_レ被_三諸緣牽」(『永平廣錄』卷四)と、更に春の上堂では「明_三得即心即佛_一底人、抛_三捨人間、深入_三山谷、晝夜坐禪

而已」(同上)と重ねて世間的束縛を脱して深山に入るべき事を強調しているのを考えると、當時の道元の境界が著るしく反世間的になつて來た事を如實に物語つてゐる。

同様な資料は古教照心の垂訓に關する場合にも見られる。重雲堂式では「堂のうちにて、たとひ禪冊なりとも文字をみるべからず」と單に禪冊以外は見てはならぬとしか規制していなかつたものが、衆寮箴規に至ると「寮中不可置俗典及天文地理之書、凡外道之經論、詩賦和歌等卷軸」と禪冊以外と云う點を細々と禁止している事を見ても道元の立場がいかに純粹性を追求する方向へと向かつて行つたかを示している。

更に、俗世間的なこと・名利を離れ、出家主義的態度を保持する様、會下の衆僧を律しているのも入越以後特に顯著になる。示庫院文は寛元四年に齋粥の法を示したものであるが、この中で齋粥を調える所に於て世間の語・雜穢の語を云うべからずと規定しており、而して雜穢の語とは衆寮箴規で見た如く名利の事・國土の治亂の話の如く俗世間的話題の事でもある。この示庫院文と同年に撰述された知事清規に於ても同様の事が繰返し説かれてゐる。例えば監院の心術として先聖の行季を引用し、或いは僧としての離るべき四邪五邪の中で「所謂四邪、一者方邪、謂通國使命」と説かれ、更に「爲續佛祖之命脈、莫赴世俗之利潤。所謂世俗之利潤者、人天之供養、王臣之歸依也。……庶爲師於出家、莫

爲師於王臣。所先於出家、後於在家。重僧輕俗也」とまで云つて政治的權力との關連を斷ち切り、その權威も認めず出家道の優位を示している。これに類する思想は、寛元二年示衆された三十七品菩提分法で「帝者の僧尼を禮拜するるとき僧答拜せず」とも示されている。尙同年示された轉法輪では、人に說法する轉法輪ですら「功夫參學して一生不離叢林なり、長連狀上に請益辯道するをいふ」とまで斷定して出家主義を強調し、下つて建長四年には、古來慕道の士は皆聚落を經歷せず、國王に近づかず深山に入つて道を求めたのだとして「須知脫憤閑得寂靜無如深山。……不理論賢不肖、不擇利鈍機、須居深山幽谷也」(『永平廣錄』卷七)と晩年になるに従つて出家主義的傾向が一段と鮮明になつてゐるのであるが、この頃注目されるのは、佛法を禪宗と稱する事をも徹底的に否定して純粹化への道を熱烈に追求している事である。

今に如來之正法眼藏涅槃妙心無上菩提、猥號禪宗。是錯也。豈無見毒乎。……(江西、石頭、藥山、百丈)如比祖師在世之時、未聞以佛法稱禪宗也。二三百年来、猥稱禪宗。未明出處之根源。頗妄稱也。(同上)

道元が禪宗、五家の宗名やその他達磨宗・佛心宗等の宗名を排するのはこれが最初ではなく、入越直後に示された佛道でこれ等宗名が悉く否定されている。然し入越以前の作であ

る辯道話・佞麼、學道用心集、正法眼藏隨聞記等で宗稱を肯定しているのを、入越以後にはそれ等を否定し、且又佛道の直後に諸法實相を示衆して三教一致思想を否定し、自己の佛法の正當性を説いて純粹性を強調している事は、宗稱の否定と共に、佛法を全一で純一なものとして把握せんとした事であり、清規によつて考察した入越以後の心境の純粹化を證するものであるが、それを物語るものの一つとして重視したい

のは『普勸坐禪儀』の修訂である。これには自筆本と流布本の二種が存し兩者には著しい字句の相違がある。この相違は寛元元年頃道元自身によつてなされた改訂に起因するものであるが、この改訂で自筆本に「西天東地、祖門遂開^①五家^②。等持^③佛印、各壇^④宗風^⑤。」とあつたものが流布本では「凡夫自界他方西天東地、齊持^⑥佛印^⑦一壇^⑧宗風^⑨。」と五家を肯定する個所は削除されている。これによつて初期の五門を許す言句もその後の心境の變化に伴い、佛法を純一・單一なものとして把える方向へと轉化して行つた事が明白である。尙兩本の相違を總合的に検討すると、自筆本から宋朝禪の臭味至及習禪的傾向の語句が拂拭され、これに代つて修證^⑩一等・打坐^⑪即佛法の醇なる思想信仰が謳歌されるに至つたと云われるが、^⑫ここにも道元の入越を境とする思想の展開が見出される。

入越を契機とする思想の展開を示すもう一つの事實は、在家成佛出家成佛の問題である。入越以前に示された辯道話・

禮拜得髓、或は正法眼藏隨聞記等では在家成佛を認めるが如き言句を述べていながら、他方入越以後の三十七品菩提分法・出家功德等では在家成佛説を痛烈に攻撃している事である。この事は興聖寺時代と入越以後の教化の對象が異つた爲とも云えるが、入越以後の思想が純粹な出家主義へと傾いて行つた事を示す一つの資料となるであらう。

以上の如く宗稱の問題、在家出家成佛の問題に關しては、入越を境に顯著な相違が見られ、然もこれらが道元の思想信仰の純粹化を示す材料を提供していると云う事は、會下の僧團のみを對象として説かれた清規に於ても同様の變化が見られる事を考え合わせると、入越以前と以後の教化の對象・目的の相違と云うよりも、思想の純粹化への展開と見るべきであり、この純粹化が入越と云う事實と共に、道元の宗教を反世間的、出家主義的なものにならしめたと考えられるのである。

1 「洗面」は延應元年、寛元元年、建長二年と三度示衆されているが、ここでは最初の示衆年をとる。

2 「辯道法」は大佛寺時代（寛元二年七月—同四年六月）に撰述されたものであるが、秋重義治「永平廣録考」（九大哲學年報第十九輯）、竹内道雄「道元」は共に寛元三年頃と推定しているが、轉林皓堂「永平元禪師清規解題」（國譯一切經所收）は寛元三年と断定している。

3 「永平廣録」の上堂年月は秋重氏の前掲論文による。

4 古田教授、コロタイプ版「普勸坐禪儀」、秋重義治「普勸坐禪儀考」（九大哲學年報第十四輯）。

5 前註の秋重氏の論文参照。